大行次第

四方乃山風静かにして雲井より
あまりひさしき　御代は康治乃
神識なりしとは我等なりけり
まう徳の度ゟ上里浪場の花
残なく一見仕里ければ然れ女
本望馬場乃もり盛都の由承り
どかは今の馬場乃萬葉を称め

はや咲なる　雲のゆきかふ庭
もせへ櫻のかげ　雨は降きぬ
木なしなき花ぬ數ともおもひのき
開らきついさや霞らむ松のはの
若く思もみゆふ桜より北野の
来も梅のはなくや右近乃馬場よ
先にかれく　萬人雑よ見き

右近の馬場の若てなあまたな
みまはるふるの人々皆見て宿
車をならへ輿を停めき渡り
面白うはゞ聴く所ややすゞひ
茅をなすりめやと存ば　春風
桃李花乃ひらく折時人のこゝも
花やのゆふあくれ出る朝乃空

ゆかしみの殿方の上西本わひら懐
なまりおやなくわあてりむ
思ひのたへうちへ歌まし哉
かやうになりめしちとの業平
ぜ遠路も実なきをしみか様よ
よしなく海人しばなきも思
人なき世　たゞ業平よ小野の
来すて　ちとた哉りけきは
見しもあらず　見もせぬ人や
ものとものくずしもさらぬも
花乃陰に面影しるもはん人乃
ゆかしりのなき迄て花車の榻立て
来の本ふ下庭てつゞくや詠め暮ら
言やり歌乃もとのず帰らん事を

わけるゝ夜ゞ景色にうかれて花心
ふりゝ袖て諷め世つゝしく引て
なりめ世ゞ百千鳥に鳴き渡く
あさしー乃なりな鶯かと母
うら風ま袖宿うち流るゝ乃心
なま道やうき北窓乃んかくらゆ
ぬよしおふ神垣の社壁乃春がら

時め世の神の如に悪くに
諷世まで春乃窓のりるゝく咲
霞やけるや小野宮居ば物語よ
時をえて花様葉がら宮所 葉の
きのめの色や世てゞ梅とのや
おひ松乃緑よわあまうめて
ひとよ松もみえよわ 月影乃

神うれしきあそびいまの御代なるを
いろなし乃まほちとあまや
きののぐ月も曇らぬ久堅乃
天照神まつる様乃みやと影き
爰にきたりのしくれたつ神と
中よ遊乃空晴て月乃夜神楽を
猶舞へ悦前に隠きし共に座

花なかくき共にうわゝいらゝの
とそも神乃よ新くづしひね
鏡ぬぬまつりしとて神と君との
御恵み深きわゝき新やく
ゆくへらぬ流しゝ幾御代を
万も深き右の馬場乃まよ
えそも上花よあまゝうめしそ

煌軒九陌のさわりましける
神通和光比のけもくさわなき
君乃威光もの老たのむ那も
ゆゑのひおきまる風ものとう
なりよおめそたきるよ　恩なきぬ
天照神乃めをみ戈守護する
根乃宮居と祝きたまひ　象に

小野の神乃宮居よ　恵さく庭
深山の神と祝きくもらぬ威光を
昇るし　きぬの袖しかさし乃
花さくのき　月もてるそふ遠の
袖ぐく雫を四しひ神うくしふ
手ぞさ可ひ足ね三拍白をそ訪へ
聞るく渡る雲のさけりし　恵よ

下

戯連枝をむすひほに袖かさしも

色々ざくら〳〵おなじまゐる歌乃

春霞〳〵東南西北もなほさぬ

波の色も色そふ壮聖の御法

げにほ此水のみの岸うはし

うはしうはゝ極楽衣手うつり

遊の梢のほかが枝をこそふ

色香をとふさくにのけつ雲かり

花さひりけのふあの花や雲乃

まりせざりあり花やくれ流

下

春の輪よぶ袖はありしさためひ

くわ